

## 「田中本春記」について

——長暦二年八月・九月条の紹介——

古瀬奈津子

- 一 「春記」諸写本の概観
- 二 「田中本春記」の書誌学的知見
- 三 「田中本春記」の内容的特徴

### 論文要旨

「春記」は、平安時代中期の貴族・藤原資房（寛弘四年～一〇〇七）と夫喜五年（一〇五七）の日記である。資房は、「小右記」を書いた右大臣・実資の養孫にあたり、藤原氏の中でも小野宮流の嫡流に当たる。資房は、参議・春宮権大夫であったため、その日記は「春記」と称された。

「春記」の写本については、神田茂氏などに詳しい研究がある。「春記」の刊本としては、まとまつたものとして、『増補史料大成』本がある。この『増補史料大成』本に収録されておらずその重要性が指摘されていた写本に、宮内庁書陵部所蔵の「九条家本春記」（長暦四年正月条）と本館所蔵の「田中本春記」とがあった。「九条家本」については、一九七五年に宮内庁書陵部からコロタイプ複製本として刊行された。「田中本」は、田中教忠氏の旧蔵にかかり、孫・穂氏の所蔵となっていたが、その後、文化庁に移り、一九九〇年、国立歴史民俗博物館に管理換えされた。今回は、「田中本春記」の中でも他の写

本には含まれていない長暦二年（一〇三八）八月・九月条について、写真に翻刻・解題を付して紹介し、研究者の便覧に供したい。

「田中本」は、鎌倉時代初期の写本と考えられ、紙背は弘安十年（一二八七）書写奥書のある「无相大乘宗二諦義林章」である。「无相大乘宗二諦義林章」の書かれた後、折本にされていた時期がある。重要文化財。「田中本」は長暦二年八月十七日の途中から十月二十九日までの記事を收める。十一世紀の前半から中葉にかけては現存する史料が非常に乏しく、その意味でも「春記」は貴重である。内容的にもちようど撰闕期から院政期への過渡期に当たっており、政治・社会の変化を読み取ることができ興味深い。長暦二年には資房は咸人頭で毎日、天皇と閑白の連絡に務めている。とりわけ、九月二十三日には良子内親王の斎宮群行が行われ、斎宮を送つて伊勢まで下る路次の記事は詳細で、他の日記にはみえず、その価値は極めて高い。